
es 『I'm just me!』 ~ Redbloom in Darkness編

袴 左右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Personas Ifes『I'm just me!』
Redblood in Darkness編

【Zコード】

N1867T

【作者名】

祐 左右

【あらすじ】

「心とは『絆』によつて満ちるもの。貴女様の力は絆によつて
培われた『心の力』なのです」
「わかった、じゃ、ハーレムを作ればいいんだねっ！」

隠された時間に現れる怪物、シャドウ。そいつらを唯一倒せる力、ペルソナ。

今、力に目覚めたのはどこまでも破天荒で、実に残念な美少女、

一之瀨沙耶だつた。

俺はそんな運命と物語、そして彼女に振り回され続ける。

どこまでも深く、混沌とした闇を纏わりつかせながら。

ペルソナ3の二次創作です。他の作品と平行して執筆しているため、更新速度には期待せぬよつ願います。

物語へと歩む前回～プロローグ（前書き）

今回はプロローグのみです。ペルソナ3はもう一つ、作品を執筆してありますのでよろしかつたらどうぞ。

物語へと歩む前に ～プロローグ

田の前にいる異形。

タキシードに身を包んだ、紳士然とした存在。

ワシのような鼻が長く突き出た顔、天狗のような容貌のソイツはイゴールと名乗る。

その男の血走った、飛び出るように大きい目が俺達を見る。

その大きな瞳に映りこむのは一人の少年。俺と、もう一人。

俺の隣に凜として佇む、ポニー・テールの可憐な少女、一之瀬沙耶。

彼女はその異形を見ても、わずかも驚き恐怖する様子を見せなかつた。

「……一之瀬様は仮面ペルソナという力に目覚めたのでござります」

仮面ペルソナ。

俺達人間が、隠された時間に存在する怪物、『シャドウ』を倒すことの出来る唯一の手段。

それが、仮面ペルソナ。

この現実に現れた、非現実的な現実。

イゴールと名乗る異形は、一之瀬に向かつて語り続ける。

「貴方が持つた『ペルソナ能力』とは『心』を御する力なのです

よ

「……心を制御する？」

一之瀬がイゴールの声に眩きを返す。

鈴の音のように、心地よく響く声だった。

「さよひ、心です。貴方は……『心』を操り戦う。即ち、仮面^{ペルソナ}とは心の力なのですよ」

そう、鍛えられた精神、覚悟と決意こそが力となる。……それが隠された時間『影時間』での戦い。

俺達、『ペルソナ使い』の根本とも言える部分だ。つて言うか、俺からするともう知っている話だらけつか、思いつき新鮮味にかける話題だったの、そろそろ飽きていた。

「そして、心とは『絆』によって満ちるものです」

「『絆』ですか？」

「さよひ、他者と関わり、絆を育み、貴方だけの『コノヒコニテイ』を築かれるが宜しい。『絆』じたが『ペルソナ能力』を伸ばしていくのです」

一之瀬はその可愛らしい顔で真剣に話を聞いているが、俺の中では、へえ……なんかありがちな、流れだなあ。さすが夢。……つて、感じである。

夢なのかって？ そりや、現実に天狗なんかいないだろ。

つか、もういいだろ。俺はもう帰りてえよ。
夢からの帰り方？ ……俺は知らんよ、つか帰る氣があるならどうにでもなるわ。

俺はさつと話を終わらせたい気持ちでいっぱいだったために、さつと結論付けてやろう。とした。

「要すること、天狗。強くなりたきや……」

「ハーレムを作ればいいんだねっ！」

「そう、ハーレム……は？」

俺は思わず、隣を見る。

赤みがかつた瞳を輝かせ、一之瀬は叫んだ。

そう、ハーレムと。

「ハーレム、つて、おい。待て。ちよ……」

「たくさんの人と強い『絆』を作ればいいんでしょう？」

その言葉に天狗こと、イゴールは頷く。

「……さより、その通りで『ざこ』ます。心とは『絆』によって満ちるもの、貴女様の力は絆によって培われた『心の力』なのです」「じゃ、ハーレムじやん！ そしたら強くなれるじやんっ！ わたし、一回で良いから作ってみたかっただぐ」「

え……一回つてなに？ そういうノリで作るモノなかつ！？

俺は一応、一之瀬に突つ込みを入れておく。どこから突つ込むべきか、まったくわからないけど、とりあえず。

「いや、お前。ハーレムつて言つけど、異性オンリーじゃなく、同性相手との絆もありうるわけだろ？」「

「……？ まあそうだね」

「だから、ハーレムつて言い方はなんか違うんじゃないとか」「はー、なるほどね」

深く何度も頷く、一之瀬。

そして、顔を上げて一言。

「じゃあ、わたし、逆ハーレムの女王になるつー！」

「俺の言つている科白伝わつてねえつー？」

「女の子が作る場合は逆、つて付くんでしょ？」「

「俺の言いたかった部分つてそこじゅうねえよつー！？」

俺の話を終わらせようとした意図は空中分解し、おもに一つ空回りである。

この物語は基本的に、そんなことばかりだ。

いや、物語と書つ言い方をするなら、俺の物語はもつと過去に始まつたものだつたらうじ、一之瀬、の物語もそうだろ？

「よし、そつと決まつたらアレだね。イケメンにも可愛い女子にも声掛けまくらないとね！」

「男女、マジで関係なしつー！」

「なに言つてんのー、美人はみんなわたしのものだよつ。年齢問わずつ！」

「問えよ、そーはつ。せめて、それくらいはつー！」

でも、間違いなく。

この波乱万丈で論理破綻しかけた毎日は、こいつが来てから加速したんだ。

それが幸せなことかはわからないけど、退屈なんて言葉は全部吹っ飛んだ。

計算とか、策略とか、取り繕つとか、そんなものが全部つまらないものに思えた。

「ふつふつふ。眼鏡キャラから口ボキャラ、おじ様や人外まで全部揃えないとね」

「口ボなんて存在するかあああああつー！」

もつとも、それでもなお俺にとつてそういう嘘や作り物めいた物事つてのは、依然として欠かせない存在であり続けたけど。

いや、むしろ俺は一之瀬いっぜと出会つたせいでそんなものをより強く身にまとうことになつた。それは俺が弱いから、『心に鎧を』付けなきや、こんな輝きの傍にいられないような人間じんげんだったからだ。

「こぬよつ。世の中にはメイドさんも執事さんもいるし、夢の国も希望もあるよつ！」

「同じレベルで並べんなつ！ メイドと執事はれつきとした職業で、夢の国はちゃんと東京にあるわつ！」

「……東京じゃないよ、千葉だよ？ 馬鹿なの？」

「いきなり冷たい目になつた！？」

それがどんな結果を生むのか、この時の俺はなにも知らなかつた。考えるはずもなかつたんだ。

そり、俺の物語はもう少し前までさかのぼる。
ほとんど、すべての元凶げんきゆうとも言つべき。そんな俺と一之瀬の物語。

物語へと歩む前に ~プロローグ(後書き)

原作そつひのけで進んでいく可能性があります、ご注意を。

4月6日 月曜日 ～『物語のはじまり』（前書き）

よつやく更新です。

あまり序盤は変化がないのですが、ちょっととしたことが致命的な差へと変化していきます。徐々に…ではあります。

4月6日 月曜日 ～『物語のはじまり』

物語のはじまり

時は、待たない。
すべてを等しく、終わりへと運んでゆく。

限りある未来の輝きを、守らんとする者よ。

一年間。

その『えられた時を往ぐがいい。

己が心の信ずるま。

緩やかなる日々にも、搖るぎなく進むのだ。

これより、物語ははじまる。

常に世界は終焉へと向けて、走り続けている。

物語の登場人物は、その宿めから決して逃れられる』ではない。

「はつ、登場人物がいつまでも大人しくしてゐる『愚つなよつ』

「すげー、あつたけえ……しかも、動きやすつ

4月6日 月曜日

そんなことを呟きながら俺は軽く身体を動かす。
今、俺が身に纏つてるのは、真っ黒なトレーニングウェアだつ

た。完全に黒なだけだと夜危ないんで、あちこちに小さな反射シートが貼り付けられている。

その着心地はまだ夜は風が冷たいこの季節でも、その抜群の保温性でがつちり護ってくれることを確信出来るものだ。

さらに、買ったばかりのランニングシューズは、はいた瞬間に軽さを感じてしまうような代物だった。シューズ分の重みが加わったはずなのに、軽いと思うとか何事って話だ。

しかも、走りやすい。確實に走る時の速度を上げてくれる気がする。今までこいつ靴をはいたことがなかつたので、感動も大きい。

そう、思わず……素で感動してしまった。
うん、不覚にも。

田線をゆつくりと動かす、その先には『してやつたぜ』と言ひ、自慢げで達成感バリバリの表情で「フツ」とクールを氣取つて笑いやがる男がいた。

真っ赤なトレーニングウェアを纏う、スタイルよくがつちりとしたその男は、非常に腹立たしいことに、女の子ならつこみとれてしまい立ち止まり。

……男なら、自分の顔を思い出してなにも言わずに俯いてしまうほどに、顔の整つた顔だった。ちなみに俺は男なので悪意しか持てない。

さりに腹立たしい」と、残念ながらソイツは俺の先輩だった。

「なに見てるんですか、先輩」

「いや……気に入ったようだな、夜由良」

「そう見えます?」

「ああ、見える」

とりあえず俺は睨みつけてみる。

しかし、平然と先輩はそれを受け流す。田頃から、殴られて顔の形が変形したような強持てに相手に殴りあいしているだけのことはあるな。

「いつも顔面変形してしまえばよかつたのに。」

「ふむ、で、なにか不都合はなかつたか？」

俺の内心を知らずにさわやかに問う、先輩。

「ないですよ、サイズも合つてますね……ってなんで俺の体のサイズ知つてんだつ！？」

「寮生のデータはすべてファイルにまとめられている
「見んなよつ！」

思わず、先輩相手に素で突つ込む俺。

先輩はなにやら怪訝そうな顔をした、完全に理解不能と言つた様子だ。

「なにが不満だ？」

「いや、もう。いいです。……でも、服のサイズなんかなんでわかるんです？ プロフィールに載つているわけ……ああ、大雑把なMとか」とかの規格が分かればいいんですけどもんね、身長が分かれば……」

「制服の注文は学園に出しているだろう？ 健康診断とかな」

「ええ、メジャーで計つてサイズを……って、おい！」

プライバシー皆無じゃん！

そこまで載つてんのかよ、セクハラで訴えんぞ、この野郎！

「おかげできつちり身体に合わせたものを用意できた。よつ良じトレーニングは、やり方だけでなく良い環境と良い道具を使うことでも……」

そう、トレーニング談義を一人で始める先輩。

この人には俺の方からもトレーニングの指導を頼んだと言つ経緯がある拳句、ショーズやらウェアを全部用意して貰つたんであまりキックは言えないんだが。

あんまり調子に乗んなよ、この野郎。

なにか？ 頬がよければなんでも許されるとでも思つてんのか？

先輩だからって調子に乗つたらぶつ飛ばすぞ？

「今日は俺のボクシングのトレーニングと平行して、今のお前に合わせたトレーニングを組むための確認を行う。体力測定だと思ってくれ」

「……はい」

……わかつてゐよ、無理なのは、俺にはこの人をぶつ飛ばせる気がしねえよ。

月光館学園高等部3年、真田 明彦。
あきひこ
せんだい

先輩はある理由とイケメンであると言つことで話題性の高い超有名人だ。そう、その理由とは高校ボクシングチャンピオンであると言つことだった。

もちろん、そんな称号は伊達じゃない。

先輩はランニングのときに思い出したようにシャドウボクシング

を始めるが、その時にもわかる。グローブをしている時とそうでない時の拳速の差はハンパじゃないってこと。

拳が見えないなんて、ファイクションの話だと思っていたがそういうじゃない。

……本当に見えないんだ。対面しているとなおさら……完全に拳が消える。

殴られる時の視点と、それを横から見ている視点で感じる速さの差は果てしなく大きい。

んで、腕っ節だけじゃなく顔はいい。その上、勉強も出来る。当然、女の子のファンはめっちゃいるわけだ、俺とはありえないほどの人生に差がある。

「さて、かなり時間があるからゆっくりやるか」

「……そうですね、まだ0時には果てしない時間がありますね」

「ああ、まずは軽く一時間ぐらい走るか。その後に簡単に反射神経や筋力を計らせてもらおう」

「……さいですか」

早くも後悔し始めた、俺。

真田先輩、勘違いしてません？ 俺、ボクシング部には入つませんよ？

あくまで、入れられた特別課外活動部の範囲での指導だからね？ 訓練は『影時間』が最適とか言つから、付き合つてんですよ？

まあ、確かに俺から言い出した部分もあるけどさ……命がかかってるし。それに、この活動への協力から生活費が出てる以上、手を

抜くわけにも行かないしな。

トレーニングは自分のためにこそ、必要つて訳だ。

俺は大人しく、真田先輩の指示通りに走りだす。

……そもそもこんな奇妙なことになっちまつたのは、俺の夢遊病みたいのが原因だろう。その辺の事情は追々、わかるだろうからやめとく。

まずは自己紹介だな、俺は夜由良 優^{ゆう} 月光館学園の高等部、二年生だ。

もともとの所属は、誇り高き帰宅部、次期部長を狙う帰宅部のエース……は辞めさせられ、今じゃ諸事情で生徒会なんぞに入れられ、その上得体の知れない特別課外活動部なんかに入ってしまっている。恥ずかしいわ、俺は真面目かつてのつ！

えっ、ちょっと待つてくれよ。特別課外活動つてなんだ？

……ボランティア部つてことか？

そう思つた人いる？ 正解です、それであつてるよ、無料で人々を助けるボランティアだ。ただし、人を喰らう化け物を倒す毎週日曜日の朝にやつてるタイプのボランティアな。

今度は頭がおかしいと思うだろ、イエス。俺の頭はおかしい、てか、イカれてる。

だが、このことに関しては妄想か世迷言にしどきたいところだが、マジなのだ。

なら、真顔で言え？

無理だろ、馬鹿みたいじゃねえか。こんなことをマジ顔で言

える奴は脳みそが沸いているとしか思えない。

例えば、そう。

……この世界の一日がもし、24時間じゃないと言つたらどう思つ?
なんて科白も未だに真顔で言える気がしない。

ああ、アレだ。日没までの時間にはズレがあるから毎年が出来る
とか、そういう話じゃなくてだな。

……そんなことは思わないか、思つた数少ない貴女とはお友達に
なりたいね。まあ、俺だけなんだらうけど。

で、なにが言いたいかつて言つと……面倒くさいや、やっぱ説明
すんのやめた。

どうせ、これから何度もこの話にはなるんだ。同じ話を聞くのは
好きか?

俺は嫌いだね、一度言つたことを何度も聞かれるのも嫌いだ。

今はとりあえず、俺達は化け物と日夜戦つてゐる、といふことだけ覚えてくれていればいい。

と言つても、もちろん俺は正義の味方なんかじゃない。そんなの似合わないしな。

俺は金と、自分勝手で確かになんでもない目的のため戦つてゐる。他の先輩方は正義の味方なのかもしけないが、俺にはそんな誇れる理由は存在しない。

……それと、単純に断れなかつたつてだけ、だな。

うちの学校、月光館学園は桐条グループの傘下にある。俺はその理事長とグループの跡取りである桐条美鶴にスカウトされた。
断れるわけがない、少なくとも今はな。

月光館学園は初等部から高等部まである学園だが、俺が学園入ったのは高校からだ。

これも詳細は省くが俺は父親の反対を押し切つての入学だった。父親は入学は認めたものの、一切の資金を出して貰うことはなかつた。貸すのは判子だけ。

ま、アレだよ。他人の家庭の事情なんか興味もないだろ？

……それでも桐条の学生支援制度を受けて、なんとか授業料などは卒業後払うことなどとなんとかなつた。が問題は生活のほうがね。

男子寮に入る手もあつたんだが、それだとかなりバイトが制約されるだろ。寮で生きていくぶんの食費やらはどうしたらいい。それに、金は色々と入用だ。これからのことを考えるにも少しでもいいからほしい。

卒業後、俺は父親の援助を受ける気はまるきりないんだしな。

そんな理由で常に万年金欠の俺は深夜近くまで、アルバイトを行う生活を続けていた。

でもいつからだろか、俺は零時近くになると記憶を失う妙な持病を持つていた。

気がつくと翌朝自宅の布団の中にいたり、得体の知れないアクセサリー や金を手に持つていたり、着替えていたり服がなくなつたりする。

なぜか身に覚えのない傷があつたことも、一度や二度じゃない。

はつきり言つて氣味が悪かつたが、気にしないように生きしていくしかなかつた。

へたに深く考えると逆に危険そうだったし、今上手く言つてている

ものをなんとかする必要性もない。

……ようするに見て見ぬフリをした訳だ。

これは零時になる前に家に帰っていた場合も同じ。早めに就寝出来たとしてもなんらかの変化が回りにあつたりする。

どうしたもんかね、いや、今ではそれも『影時間』に覚醒したが故に起きたものだと判断しているのだが、こうして完全に目覚めた後でも時折発生するのが問題だ。

いまだに、自分の記憶が飛ぶのはすつきりしない。

……影時間がなにかつて？

ああ、結局説明する羽目になつちまつたな。

影時間つてのは……あれだ。

一日と一日の間に存在する狭間の世界。

言つちまえはそつ、悪夢だ。化け物が謳歌する、悪夢の世界。

それが影時間だ。

*

新都市での公共交通はバスとモノレールに大半を頼っている。そのうちの一つ、モノレール『あねばづる』車内。

もう夜も遅く、辺りに人気がない中でアナウンスが流れる。

「本日は、ポイント故障のため、ダイヤが大幅に乱れ……」

誰も聞くことのない、お詫びのアナウンス。

声は声として確かに存在しているのに、あらうがなかろうがどう

でもいいその謝罪は、もつ存在していないのと同じだ。

あるけど、ないのと同じもの。

ゆれる車内。

まばらに座る人々、でも、しゃべる人は誰一人としていない。
だから、よくそのアナウンスは響いた。
ひとりだ、こんなにも近くに人がいると呟つのに。

『わたし』はひとりだ。

「お急ぎのお客様には、大変ご迷惑をおかけ致しました」

わたしは耳を閉ざす。

眠るように目を閉じる。

外の世界の一切を拒絶するように、耳を塞ぐ。

ヘッドホンから流れてくるのは、絶対に抗いようのないものへ戦
いを挑む、そんな歌。

勝ち目のないものに、負けないと強く立ち誇る歌。

憧れる。

そんなわたしは絶対に勝てないもの。
だつて、怖い。

怖い。

絶対に消すことの出来ない、焼きぬくすことの出来ないモノ。

『の人』のように、強くはなれない。

でも、それでも、わたしがこの歌を聴くのは 。

「次は～、巖戸台～……」

わたしは、ひたすらに外を眺め続ける。

そこにわたしの心を動かすものは存在しない。

わたしの心を動かすものは、いつだってわたしの胸の内側にある。わたしの心を脅かすものは、いつだってわたしの外の世界ある。

でも、わたしの生きる世界は。
……いつだって、外の世界だ。

ようやく、目的の巖戸台に到着したモノレールを降りる。駅の時計を確認すると、思つたとおり到着時間はかなり予定よりも遅れていた。

時間はもうすぐ零時、わたしはかるく息を吐く。

別に思い通りにいかないのは今始まったことじゃない。

わたしの人生を物語にしたら、それはいつだってトラブル続きの話だ。つて言うか、むしろ始まりからトラブルで、たぶん最後もトラブルで終わるんだろう。

平坦な毎日は退屈だらうけど、アクシデントが多くて逆にまたか、つて悲しみや笑いを通り越して、呆れてくる。しまいには、何も考えたくなくなる。

まあ、そんなわたしのせいじゃないし。

そもそも好きでそんな人生送ってるんじゃない。

「 」の電車、辰巳ポートアイランド行き、本田の最終電車となつて
おります」

そんな構内アナウンスを背景に、だけ別にそれに耳を傾ける人
はなく、ただそれぞれの目的地へと歩いていく。

もちろん、わたしもその中の一人だ。

へタに誰かといふより、赤の他人にまぎれて歩いているほうが落
ち着くのはなんなんだろう？

再び、両耳のヘッド音から流れる音に意識を置く。
決して、なることの出来ない自分へとなるために。

そんな、いつものように…… そんな状態でわたしは駅を出ようと
した。 出ようとしたりたのだ。

それは前触れのなく訪れた、ようだった。

それがなにをきっかけにして起きたもののかわたしには理解で
きなかつた。

だけど、もし理解できたからってそれがなんなの、って話だつた。

まず、田の前が暗くなつて、プレイヤーから流れる音楽が止まつ
た。

田が暗闇に順応するまで、僅かな時間の混乱する。

それが収まって、思つのは「停電なのかな」と言ひいど。

そう、周囲の一切の電気で動くものが全てがその活動を停止してい
たのだった。

でも、とわたしはすぐこその考えを否定する。

照明が消える、それはいいとしても。

……なぜ、プレイヤーからの音楽が止まつたのか。
その疑問には答えようがない。

異変はそれだけでない、どこか周囲の気配がおかしい。

余計な物音、自分以外の動くものがまったく存在しないのだ。

わたしは周囲を見渡しながら、歩き出す。

とりあえずは目的地へと急ぐために。それが出来るなら、特に問題はないのだった。

わたしが駅から出て、それでもなお自分以外に人を見かけることはなかった。

異様なほど静かな街。

その人気のない街に、棺のようなオブジェが乱立している。大きさは……そう、ちょうど人が納まる程度。

もし人が納まっているのなら、なんて想像は妄想に過ぎるといつものだろう。

わたしは自分の子供っぽさにすこし笑つた、想像力が豊かなのはイイコトだけど、もうすこし大人になつてもいい年頃だと思う。

わたしは歩く、笑みを浮かべてひたすらに。

なぜか地面に染み出している、どこか血の様な色の水溜りを踏みつけて。

見上げれば、深夜零時の空は緑色に染まり、光る月は異様なほどに巨大で明るかつた。

そう、どのアナクロ時計も指し示す時間はすべて……。

あの異様な天を突く様に。

*

わたしは見上げる。

どうやら、これが自分の目指していた目的地であるようだった。

『月光館学園巖戸台分寮』、入学案内通りの住所で間違いない。そう、わたしは転入のために、その住居を寮に移したのだった。当たり前なただそれだけのこと。

たつたそれだけのことに転入前日からこうしたろくでもないことが起きるのが、わたしの人生というモノだった。

ま、仕方ない。

そういう風に生まれついているんだから。

外観は、どこか古くしかし特徴的なその「デザインの建物」。だけど、十分にある種のセンスを感じられるオシャレなもの。個性^{ユニーク}と好ましい外観、って言うのは、混同された挙句見失われがちだ。個性的がほめ言葉なんて誰も思わない。

「デザイン」という視点以外で建造物を考えるなら、あとは機能的か、どうか。

機能的って言うのは、突き詰めていけば十分に「デザインとして美しいものだとわたしは思つけど。

その照明がついていないのは深夜だからだろうが、それともこの異変のせいなのか。

未だ、わたしのヘッドホンからは音楽は鳴らない。

考へても無駄か。

わたしは扉を開け、中へと踏み込む。

やはり、外から見たとおり中に明かりはない。

「ようじや」

突然の歓迎の言葉。

それは幼い子供の声だった。

その声の主を探す。

いたのは寮の入り口のカウンター、声の主は、白と黒の横縞で上下をそろえた囚人服のような服装の、小さな男の子だった。

「遅かつたね。長い間、君を待つてたよ」

「この寮の人だらうか。

いや、このにいる以上はそつなんだらう。でも、どうして子供が？

子供は一枚のカードを手にしてる、そして、それを見せるよつこして言った。

「この先に進むなら、このに署名をして。……一応、『契約』だからね」

「手続きは済ましているはずだけど?」

寮にはもう入るだけのはず。

……どこか、この子供に得体の知れないものを感じた。

子供は嫌いじゃない、すく優しくしたくなる。

幼い間ぐらいには幸せであるべきだと思ひながら。

でも、そんな感情とは別に……。

「ああ、怖がらないで。たいしたものじゃないんだ、ここからはず自分の決めたことに責任を取つてもらひつてだけだから」

「別に怖がつてなんかない」

「そう?」

微笑む子供、その手にあるカードにはメッセージが書かれている。
それはこんなものだった。

『我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん』

その下にあるのは署名の欄。

なにかの冗談だらうか、これは。

そう思つてもわたしさ。

間違ひなく、手を伸ばし署名した。
一之瀬 沙耶と。

それは間違ひなく、わたしの意思だった。

わたしは言われなくても、そう生きているんだから。

「確かに」

子供は署名されたカードを見て、満足そうに呟く。

「時は、誰にでも結末を運んでくるよ。たとえ、耳と目を塞いだと
してもね」

わたしはどこか自分を見透かされたような気分になつた。それを振り払つよつて一層強く、声を張る。

「これでいいの？ これだけ？」

「ああ、これでいいよ」

「……当たり前のことじやない、こんなのは」

「そう、当たり前のことだね。自分で選んで、受け入れる。……それだけのことだ」

子供は薄つすらと笑みを浮かべる。

「……ああ、始まるよ」

そういつと、その子供は闇に溶けるかのように消えてしまった。

わたしは一瞬唖然とするも、この異常な雰囲気の中ではそれほどの違和感を感じなかつた。

どこか夢の中にいるような感覚、今自分が目覚めているのか。確信が持てない。

わたしは今、ちゃんと現実にいるの？

わたしがいるのは……本当にいつもの外の世界？

「……誰！？」

その時寮の奥から女の子の声がした。

*

変容した世界で呟き続ける少女。
その呟きは誰にも届くことはない。

「……結局、この時間になるまで出来なかつた

彼女は血塗りで床に座り込み、今ロボットあることを実行しようとしていた。

…。

出来なかつた。

その手に冷しく輝く金属性の物体。
それはそう、銃器のような形をしていた。

「コレを額にあてて……」

毎日、毎日。

ある事実を知った時から、ある世界を知ったときから。
彼女はこれを繰り返してくる。

呼吸を荒くし、手が震える。

「引き金を引くだけ……なのに」

考えるだけで、駄目なのだ。
実行しようとしたとしても。

頭を抱えながらも、左右になにかを振り払うような動作をしてから。

真っ直ぐに前を向く。

「やひなきや……」

その声にあるのはやうなばならないと言ひ、決意と義務。だが、それを搖るがすほどにあるのは恐怖と拒絕。どひしよひもない、恐怖とこゝの敵。

それと対峙し、それでも彼女は咳き続ける。

「 もひなせや……」

彼女は両手をで銃器のようなものを握り締め、銃口を額に向けた。手は震え、汗がにじむ。

金属性の物体が額にぶつかり、震えのせいでカタカタカタ、と鳴る。

それでも叱咤するよりは最後にもう一度咳き。
そして……。

「 つー? 」

彼女は銃器のよつなそれを手放した。
そのまま脱力し、うつむく。

乾いた涙の跡を伝う、涙。

「 あはは……やつぱり、無理なんだ。わたし」

彼女は自分のあふれ出す感情をどうすることも出来ずにはいた。自分はどうなことでもしてみせる、そう決めたはずだった。出来ることならなんだつて……その誓いはこの程度のものだったのだろうか?

「「んなんで…………えの訳ないよ」

その声を聞くモノはやはり誰もいない。

*

落ち着いた彼女は部屋を出て、階段を下りてロビーへと向かった。たいした意味など無い、眠れなかつたのだ。

気持ちが高ぶつてこると、いつ理由を差し引いても、この『時間』に無防備でいるなど、まともな神経で出来るとは彼女には思えなかつた。

どうせ眠れないのなら、なにか飲みながら一息吐いた方がいい。

しかし……。

ロビーの奥には異変があつた。

本来なら、今の時間帯は『普通の人間は活動することができないはずなのだ。

それなのに明らかに何者かの気配がする。早くなる鼓動、恐怖と緊張感。

「「の時間に……じうじう……」

歩みを進めて見えたのは、自分と同じ年くらいに見える女の子だった。

髪を束ねた顔立ちのきれいな女の子……。

それが明りのない寮のロビーに佇んでいた。この時間帯ゆえの、不穏な空氣と暗緑の色彩の中で……その女の子どこか赤みがかつた瞳。こんな状況の中で平然といる佇まいが、どこかまともな人ではないような。

「まさか……」

彼女はその異質な侵入を睨み付ける。
敵意と恐怖を持つて。

今の時間にいられるのは普通の人間じゃない、いるとしたら、特別であるか……。
人間でないか、だ。

一人もの戦力が今、トレーニングによつて寮にはいない。
もう一人はいるかどうか、わからない。
今は自分ひとり。

それが彼女から冷静な判断力を奪い、必然的にある選択を迫つた。

「え……な、に？」

目の前の女の子からつぶやかれた言葉。
その意味を深く考へることなく……彼女は自ら（・・）の額に銃口を向けた。

田の前の女の子の様子から困惑を読み取ることもなく、覚悟を決めるとともに、必死の形相で田を堅くつむる。

故に、もうその女の子がどんな表情を見せようがもう彼女には届かない。

そして、とうとうその震える両手で引き金を……。
引き絞ろうと……。

「待て！」

背後から呼びかけられた女性の声。

とつさに振り替えるとともに彼女は銃を下した。

そこにいたのは明確に彼女にとつて味方であり、それを確認してすぐに周囲が明るくなつたからだ。

安心から彼女は呟く。

「あかりが……」

それは悪夢が終わつたことを意味した。

一之瀬沙耶の物語が、今日という一日が、さらに最悪にならなかつたことを意味していた。

*

現れた人物は彼女にとつて先輩にあたる人物であった。

「……到着が遅れたようだね」

一同がやや落ち着いたのを確認し、場をまとめるためにそう侵入者に声をかけると、そのまま自らを指し自己紹介を始める。

「私は、桐条 美鶴。3年だ。この寮に住んでいる者だ」

桐条グループの現当主の一人娘であり、跡取り。

学園でも特別な存在である桐条先輩は、彼女にとつて複雑な感情の対象でもあった。

そんな美鶴に彼女は訝しげに問いかける。

「……誰ですか？」

「彼女は『転入生』だ。ここへの入寮が急に決まつてね……」

目の前の侵入者を指し、そう説明する美鶴。
その言葉に領き、平然と自己紹介を始める不審な侵入者、もとい
『転入生』。

「はい、一之瀬 沙耶です。モノレールが遅れちゃいまして……」

ここやかに敵意を削ぐような笑みを浮かべる沙耶。

それは男女問わず、惹きつけられるような力が備わっていた。
思わず、目が外せなくなつた自分を自覚し、彼女は困惑する。

「ああ、聞いているよ。……君はいづれ、一般寮への割り当てが正式にされるだろ?」

「は〜、一般寮ですか?」

「そう、ここにいるのは一時的な処置だと思つてくれ」

「はいっ、わかりました」

特に疑問をはさむこともなく、会話をそのまま楽しむかのような上機嫌で答える沙耶。

彼女はどうしたらいいかわからず、とりあえず自らの先輩に問い合わせる。

「……いいんですか」

「……さあな」

返ってきたのは、答にもならなよつた答え。

聞こえていたのか、沙耶が首を傾げたそぶりを見せた。美鶴はようやく気が付いたかのように口を開く。

「ああ、そうだったな……彼女は岳羽ゆかり。この春から一年生だから、君と同じだな」

突然、紹介を促され戸惑いつになるも、軽く会釈する。

「……岳羽です」

沙耶はそれに対して一層、笑みを深めた。

「同級生なんだ！ ようじくだね！」
「えつ……あ、うん……」

今まであった奇妙なことは一切触れず、なかつたかのよつて振る舞う沙耶。

そこに違和感を感じながらも、気が付けば彼女……岳羽ゆかりは笑みを返していた

「…………」

にへりー、と顔を崩してみせる沙耶。

つられて同じような表情を浮かべそうになるゆかり。

(つい、なにやつてるんだ。わたしつー?)

美鶴は一人の挨拶が終えたのを見計らい、声を掛けた。

「今日はもう遅い。部屋は3階の一番奥に用意してある。荷物も届いているはずだ、すぐに休むといい」

「あ、じゃ、案内するんで、つこて来て下せー」

ゆかりは自ら案内を買って出る。

先輩である美鶴にやらせるわけもいかないといつ事情もあるが、自然とそいつしたくなってしまったのだ。

沙耶はそれに頷いて、ゆかりと共に歩き出す。

「うん、お願ひね。出来さん」

その歩き去る一人の背中を、美鶴は見つめ続けていた。

*

沙耶を案内しながら3階へと上がっていく。

「2階は男子寮だからで、あんまり行かないよつ」ね

「男の人もいるの？」

「うん、男女共同の寮なんだ」

「ふうん、なんか建物のそうだけど変わってるねー」

雑談を交えながら、3階へと上がり、部屋への扉が並ぶ廊下を歩いていく。

立ち止まつたのは一番奥の扉。

「1Jの部屋だね。一番奥だから、覚えやすいでしょ?」

ゆかりはそう、沙耶に問いかける。

「やうだね、一番奥に行くのめんどくさいかもだけど」

「あ、それはあるかもね」

「……トイレも一番遠いし」

「まあ、夜中とか特にね。つて今、夜だけど」

初対面のはずなのに、自然に親しげに話せている。
ゆかりは特にそこに疑問を持つことはない、不自然さがないから
だ。

自分がさつきまでいた状況が、異質で不自然だったという認識は
すでに外れかけている。沙耶に抱いていたはずの恐怖感すらも。

「えっと、あとなんかあるかな？ 何か訊きたいことがある？」

ゆかりは案内の最後に沙耶に確認した。

一応の、お約束のような確認。たいていは特になく、で通される
よつな。

しかし、考えるそぶりもなしに言葉は返ってきた。それも、ゆかり
にとつて意味不明なもの。

「署名したんだけど、必要あった？」

「え？ 署名？」

署名……特に心当たりはない。
なにを言つてこるのかが、つかめない。

「あ、別にいいよ。うちの勘違いだと思つから」

「やう？」

疑問には思うが、本人がそういうのだからいいんだから。そう気を取り直して、もう一つ確認しておくことにした。ゆかりにとつてはむしろこちらが本題なのだから。

「あの……ちょっと訊きたいんだけど」

「なに?」

「……駅からここに来る間、ずっと平氣だつたの?」

沙耶は不思議そうな目でゆかりを見つめる。

数秒の沈黙。

そして、田を細め、口元をゆるめて返答した。たつた一言。

「平氣だつたよ」

「そつか……」

(なんかお互いに心うしらつて、わからんない感じなのかな)

ゆかりは、表情を和らげる。

自分が困惑しているように、沙耶もやうなのだ。だからこそ、そのことに触れずにいる。ゆかりはそう解釈することにした。

「……ならいいんだ。じめん、気にしないで。あー、じゃあ、私は行くね……」

「うん、案内してくれてありがとつね」

ゆかりは頷いて歩き去ろうとして、すぐに立ち止まる。

「一言、フォローするため」。

「あー、あのや」

「ん？」

部屋に入り、沙耶は、動きを止めた。

「色々と、わからなことあると思ひたゞい、それはまた、今度ね…
…おやすみなさい」

そう一方的に告げて、ゆかりは階段を降りていった。

「おやすみー」

と、背後から返つてくる明るい声。

ゆかりはその声に口元をゆるませながらも、美鶴への報告と、これからのことについてざっと相談するが、そのことの頭を巡らせつつあつた

4月6日 月曜日 ～『物語のはじまり』（後書き）

2作品ごとに変化がつけられるかはわかりませんが、頑張ってみますので気長にお待ち頂ければ、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1867t/>

Persona3 Ifes 『I'm just me!』 ~ Redbloom in Darkness編

2011年10月8日02時06分発行